



ジャクソンのシネマハウスで会いましょう！

前橋市国際交流員 ジャクソン・バニスターの活動報告

令和8年9月

前橋市のミニシアター「前橋シネマハウス」。映画好きの国際交流員ジャクソンが、支配人おすすめの一本を観て、レビューをお届けします。映画は国境を超える！
皆さん、映画館でお会いしましょう！



9月の映画

『FUJIKO』

2026年 日本



Jackson Bannister

群馬県前橋市の国際交流員 (CIR)として、日本人と外国人との文化的理解を深めるために活動しています。



映画はもう一人の家族

～前橋の街で新たな映画の発見を。地域とつながりを持った映画館を目指します～



映画を通じて家族のようなつながりを地域の皆さんと作っていききたいという思いから“前橋シネマハウス”をオープンすることになりました。小さな映画館ではありますが、前橋の街なかから様々な映画を発信しています。上映が少ないミニシアター系の良作からシネコンで上映が終了したヒット作、お子様と一緒にファミリーで楽しめる作品、過去の名画など様々なジャンルから作品をセレクトし新しい映画を発見してもらえる。そんな“シネマハウス”をつくっていききたいと思います。

MISSION ————— 前橋千代田町五丁目1-16前橋プラザ元気21別館3階

FUJIKO

逆風の中でも、 人生はロックンロール。

今回の映画レビューでは、現在前橋シネマハウスで上映中の『FUJIKO』を紹介します！

日本映画の中には、まるでCMのように見えたり感じられたりする作品が多く、演技に関しても、同じように整いすぎていてどこか不自然に感じられることがある。そんな中で、

『FUJIKO』はまさに待ち望んでいた新風のように感じられる作品だ。『FUJIKO』は、厳しい社会に立ち向かうシングルマザーという物語そのものを革新的なものにしたわけではない。むしろ、その設定はかなり王道적이다。それでも本作が際立っているのは、期待の若手監督・木村太一が、その馴染みのある物語を、躍動感のある映像、印象的な演技、そして意外なほど明るく遊び心のあるトーンで描いているからだ。

本作は、昭和の日本を舞台に、娘の麻理を育てながら苦闘するシングルマザー、富士子の姿を描く。元夫の家族や自身の母親、そして当時の社会に根付いていた価値観からの圧力にさらされながらも、富士子は「夫に頼って生きるべきだ」という考えを受け入れようとはしない。彼女の苦悩を通して、本作は、シングルマザーに対する支援が今ほど一般的ではなかった時代に、多くの母親たちが背負わなければならなかった犠牲や苦労、そして強さを描いている。突き詰めて言えば、

『FUJIKO』は『ロッキー』のような作品だ。ただし、戦う相手が社会なのである。

まず、この作品が映画そのものを「革命する」ような作品だと言うつもりはない。物語としては、「社会の常識や周囲からの期待に抗い、自分自身のやり方で成功しようとする、芯の強いシングルマザー」という、比較的よくあるものだ。これまでも、このような基本的な構造を持つ作品は数多く存在する。

しかし、だからといって本作が凡庸になるわけではない。むしろ、その見せ方が非常にうまく、純粋に楽しめると同時に、考えさせられる作品に仕上がっている。物語そのものを無理に作り変えようとするのではなく、木村監督はさまざまな演出によって、

そこに勢いと個性を与えている。

その最も分かりやすい例の一つが、富士子とロック音楽との関係だ。ロックは、かつてギタリストだった父親から受け継いだ単なる趣味ではない。それは、母親として、そして一人の女性として富士子に求められているものとは別の、彼女自身のアイデンティティの一部なのである。彼女がロックを愛すること自体が、母親や義理の家族から押し付けられる「こうあるべき」という生き方への反発になっている。

同時に、富士子の個人的な闘いは、1970年代後半の日本社会という、より大きな環境とも結び付いている。彼女に向けられる期待は、単に身近な人たちが意地悪だから生まれているわけではない。当時の女性に特定の生き方を求めていた、より大きな社会の仕組みを反映しているのだ。反抗や個性と結びついたロックは、そんな生き方を拒む富士子の姿を象徴するものとして非常にしっくりくる。父親とロック、そして富士子自身のアイデンティティとのつながりは、映画の序盤から明確に示され、その後の彼女の生き方にも影響を与え続ける。

シングルマザーの苦悩という題材から考えると、かなり重く、物悲しい作品になることを想像するかもしれない。しかし、

『FUJIKO』は意外なほど明るいトーンを保っている。富士子が何度打ちのめされても、彼女は麻理を守り、生活を支えるために前へ進もうとする。この前向きさが、本作を重いテーマに押しつぶされない作品にしている。富士子は確かに苦しんでいる。しかし、映画は観客に対して、常に彼女をかわいそうだと思うよう求めているわけではない。

このバランスを成立させている大きな要因の一つが、キャストの演技だと思う。キャスト陣は、物語のシリアスな部分とコミカルな部分の両方をしっかりと成立させている。特に富士子は、周囲の人々や置かれた状況によって何度も追い詰められながら、それでも戦い続けるだけのエネルギーと頑固さを持った人物として描かれる必要がある。その演技によって、キャラクターには作品全体のテンポにも通じる推進力が生まれている。物語が重くなっても、富士子自身が完全に打ちのめされてしまったようには感じられない。

この「シリアスさ」と「遊び心」のバランスこそ、本作の大きな魅力の一つだと思う。シングルマザーが貧困や家族からの圧力、そして社会的な偏見に苦しむ物語は、少し間違えれば非常に重苦しいメロドラマになってしまう。

しかし木村監督は、物語を常に前へ進めることに重点を置いているように感じられる。その結果、本作は深刻な問題を扱いながらも、観客に対して「この話は悲しいですよ。だから悲しい気持ちになってください」と何度も訴えかけるような作品にはなっていない。

技術的な面でも、本作にはかなり感心させられた。特に、現在日本で作られている同じような映画と比較すると、その映像表現は非常に印象的だ。作中では何度もアニメーションが使われており、実写映画ではあまり見られないような楽しい躍動感を生み出している。実写、アニメーション、編集、音楽が組み合わせることで、本作には「ただ綺麗に撮った」だけではない、明確な映像的個性が生まれている。キャストもスタッフも、他の作品とは一味違うものを作ろうとしていたことが伝わってくる。

そして、本作の大きな見どころの一つが撮影だ。近年の日本映画には、あらゆるものをできるだけ洗練されたものとして映し出そうとする傾向があるように思う。使用するカメラからカラーグレーディングに至るまで、非常に「完璧な」映像が多い。それ自体はもちろん美しいのだが、その結果として、本作では、特徴的なカメラアングルや躍動感のあるトランジション、アニメーション、

そして少し青みがかったカラーグレーディングなどが使われており、映像に「質感」と「重み」を与えている。すべてを完璧に綺麗に見せようとするのではなく、あえて映像に少し荒々しさを残しているのだ。それによって、個人的にはより「映画らしい」作品になっていると感じた。映像そのものを美しく見せるためだけではなく、登場人物や物語を表現するために映像が使われているように感じられる。

何より、ここに木村太一という監督の可能性が感じられる。映画というのは、脚本、演技、撮影、編集、音楽、そして作品全体のトーンといった、さまざまな「材料」からできた料理のようなものだ。そして『FUJIKO』では、調理師である木村監督が、それらの材料を見事に組み合わせている。

この物語は、一步間違えれば過剰なメロドラマになっていた可能性がある。作品のあらゆる要素が、「この話は悲しいんですよ」と観客に訴えかけるような作品になってしまってもおかしくない。しかし木村監督は、創造的な演出によって作品に勢いと遊び心を与え、最初から最後まで興味を持って見ることのできる作品に仕上げている。

総じて、『FUJIKO』は、社会から逆風を受けながら生きるシングルマザーの苦悩を描きつつ、重いテーマとユーモア、勢い、そして独創的な映像表現をうまく両立させた、非常に魅力的な作品だと思う。決して革命的な物語というわけではない。しかし、必ずしもそれは必要ではない。大切なのは、与えられた物語を監督がどうするかだ。そして木村太一は、この物語からかなり多くのものを引き出している。

圧倒的な逆境の中でも成功を目指して戦う人物の物語が好きな人はもちろん、昭和の日本社会において女性に求められていた役割や期待について、別の視点から考えてみたい人にもおすすめしたい。

何より『FUJIKO』を見て改めて感じたのは、たとえ物語そのものがありふれたものであっても、そこに自分なりのものを持ち込める人たちが作れば、新鮮な作品になり得るということだ。